

STEBMO

ステブモ

スティーブ・ムーア（ステブモ、1976年1月9日生）はアメリカワシントン州シアトル出身の器楽家。Wurlitzers、カシオトーン、ベルを愛するピアニストとして知られる同時に、彼はトロンボーン奏者そして作曲家でもある。スタジオミュージシャンと伴奏者としての彼の経歴は幅広く、共演アーティストはソングライターのスフィヤン・スティーヴンス、ジャズのヒーロー、ビル・フリゼル、ブラックメタルの一匹狼、SunnO)))を含む。

現在のムーアのある背景には、パシフィックノースウエスト（アメリカ合衆国北西部太平洋沿岸）とニューヨークでフリー・インプロヴィゼーションをして過ごした過去がある。その鮮やかなシーンは、ジュリアン・プリースター、スティーブ・タレ、ロビン・ホルコム、ウェイン・ホービッツといった現代の強豪との共演と彼らの間近で学ぶチャンスをもうけに与えた。さらに、1997年にはプロデューサーのタッカー・マーティンと出会い、レコーディングを共にする事になり、ムーアの音楽とキャリアに大きなインパクトを与える。彼らの共同作品はアンビエントを主とするMount Analog、そしてジム・ホワイトの革新的な音楽からシアトルの代表的なロック・ミュージシャン、Mudhoneyなどが上げられる。

2001年から、ローラ・ヴェイアーズのバンド、Saltbreakersの一員としてキーボード、トロンボーン、シンガー、時にはベースプレーヤーとして活躍。数々の世界ツアーを共にし、4枚のアルバムのレコーディングにも参加する。その内の3枚はNonesuch Recordsからリリースされている。底に響くシンセサイザー、覚えやすいフレーズ、インプロヴィゼーションの感覚がムーアがSaltbreakersと共演する際の特徴である。

作曲家としてのスティーブ・ムーアは、SkerikのSyncopated Taint Septetのメンバーとして名が知られる様になる。チャンスの訪れは、サクスのベテランが週一回シアトルのOwl n' Thistleでのパフォーマンスへの参加とインプロヴィゼーションへの復帰をムーアに勧めたことに始まる。そして次に訪れたのは、2003年の秋、Ropeadope RecordsによるSkerik's Syncopated Taint Septetのリリースだった。ジャムバンドのシーンに小さな革命を起こし、バンドは大規模

なツアーを開催、ロサンゼルスグラミー賞受賞エンジニア、ハスキー・ハスコルズとのレコーディングの機会を得る。その結果Hyena Recordsからリリースされたアルバム「*Husky*」はファンクとジャズのダークで見事な一品である。

2005年の秋、シアトルのレジェンド的なバンド*Earth*の復帰アルバム「*Hex*」のレコーディングに、プロデューサーのランドル・ダンからの指名により参加。9年のブランクの後のプロデュースとなったこのアルバムを通して、ディラン・カールソンの率いる*Earth*は、よりクリアなギター、よりオープンで牧歌的なスタイルのサウンドを取り入れる。ムーアのトロンボーンとキーボードは、このアルバムとその後のツアーで重要な役割を果たす。このサウンドは3枚のアルバムを通して発展され、「*The Bee Made Honey In The Lion's Skull*」でサイケデリックの頂点を達す。このアルバムはビル・フィゼルも参加をしており、2008年初期にリリースを予定している。2006年には、レコード会社Southern Lordの仲間でもあるSunnO)))からの要望で、日本のバンドBorisとともに彼らの新しいアルバム「*Altar*」のレコーディングに参加、その後ヨーロッパとアメリカの数々のフェスティバルで、同グループとパフォーマンスを共にする事になる。

彼とこれまでに共演してきた数々のアーティストの様な多彩な音のパレットに恵まれ、スティーブ・ムーアのデビューアルバムは、ジャズ界に新鮮な息を吹きかけるものと言っても良い。長い間コラボレートしてきたタッカー・マーティンのプロデュースにより、このアルバムはフレッシュな構成の視界と、わずか一日のオールスターのリズム・セッションで作り上げられた火花を散らしての登場。ブラッド・メルダ、トーリ・エイモスを含む多々との共同作品を仕上げた経験のあるマット・チェンバーレンは、現代でももっとも有名なドラマーの一人である。その彼に加わりこのアルバムの制作に参加をしたのは、またも偉大なベーシスト、トッド・シッカフーズ、名誉ある音楽会のサイドキック、アニ・ディフランコ、ジェニー・シェインマンなどがある。そして彼らの思いを現実化させるために、ムーアとマーティンはバイオリスト、エイヴィンド・カングの見事なストリングの配色、ダグ・ワイゼルマンによる不気味ともいえる木管楽器の音色の力を借りる。その結果完成した9つのトラックは美しく、インストラメンタル音楽の真のオリジナルといえるであろう。